

せん事を期す

一我等職工は富國強兵の基を築かんがため理想的職工組合を組織して労働問題の解決を圖らん事を期す

一我等職工は自治的精神の修養常識の涵養及び技術の進歩を圖らん事を期す

而して其の態度は飽迄も健穩を持し、又一方天は自ら助くる者を助くとの格言を信條とし純職工のみ手に依つて組織したのである、そうしてその事業としては

機關誌「工場生活」の發行法律顧問部、消費組合部、労働爭議調停部、醫療部、貯金部、共濟部

等を舉げ尙ほ其他各工場に會直營の酒保を設け、其收益を以て失業職工の救濟を行ひ、又別動隊として労働者の代表者を議會に送る爲め納税貯金組合等計畫を立て、會員は日没の頃工場より歸れば、直ちに組合運動を努め爲めに創立後僅かに五ヶ月にして一千五百人の加盟を見。日野國明板野友

進兩氏に法律顧問を委囑し。加盟工場は

瀧車會社 久保田鐵工所 住友鑄鋼場 大阪電燈 大阪砲兵工廠

大阪鐵工所 中島三工所 安治川鐵工所

等十四箇工場にして、創立者及び幹部としては

堤豹三 横田千代吉 藤井久也 平井榮藏 丸山利三郎 堂前孫三郎

猪田常吉 谷村藤市 西尾末廣 武岡磯吉 有田鼎時 坂本孝三郎

氏等で尙ほ特に忘れる事の出来ない事は村島歸之氏及び小川滋二郎博士が常に親切に指導された事である、斯く圓滿に發達を遂げつゝあつたのであるが遺憾なる哉、大正六年末に至り諸種の事情は遂に解散の止むなきに至つたのである。

然れども一度蒔れたる組合運動は消ゆ可きものにあらず、況んや各階級を通じて惜まれたる期成會は有力なる一種の研究會として形を残したのである。

第三章

再度の旗擧げ